

2025.11.30.

「ノアの方舟：裁きと救い」

旧約 創世記 7 章 1 節～8 章 2 2 節

新約 ガラテヤの信徒への手紙 6 章 7～8 節

1. はじめに

今日からアドベントに入りました。アドベント・クランツの一本目のローソクに火がともされました。12月25日のクリスマス前の4つの主の日を含む期間がアドベントですけれど、このアドベントという言葉は日本語では神の子イエス様が天から降られるのを待つという意味で「待降節」と呼ばれます。しかし、元々語源となりましたラテン語の *Adventus* (アドベントゥス) は「来る」「到来する」という意味で、「待つ」という意味はありません。私共の心の姿勢としての「待つ」ということよりも、神様の御業として「来る」「到来する」という所に力点があるわけです。では、何が来るのかと言えば、イエス様です。しかし、この到来するイエス様は二重の意味を持っています。それは、旧約の人々にとっての救い主イエス様と、新約の人々、つまり私共にとっての再び来られるイエス様です。イエス様は再び来られます。このイエス様が再び来られることを信じる信仰を新たにし整える時、それがアドベントということになりましょう。それは賛美歌 21 の中の分類において「待降・再臨・アドベント」と記されていることから明らかです。教会ではアドベントに入る前から、クリスマス・リースやクランツを作ったり、クリスマスの案内やポスター、クリスマスカードを作ったり、何かと慌ただしい時を過ごすのですが、イエス様が再び来られることに眼差しを向ける、終末を目指して歩む、その信仰を整える時として歩んでいきたいと思います。

2. 終末信仰

私は20歳で洗礼を受けましたが、この終末信仰ということについてはピンとこないと言いますか、そんなに大事なものだとは思っていませんでした。若いときは、自分はいつまでも生きていっていると思っておりますから、ピンとこないのも仕方ない事だったと思います。しかし、今は、この「終末的信仰」というものが、私共の信仰において決定的に重要なものであると考えております。この終末的信仰と言いますのは、単に終末にはイエス様が再び来られて、新しい天と地において私共の救いが完成するということを信じるというだけではありません。この終末において与えられる救いの中に、新しい命の中に、私共は既に生き始めている。そのことをしっかり受け止めることです。それは、私共はアドベントの日々を歩いていくわけですが、このアドベントの日々、クリスマスはまだ来ていない。しかし、クリスマスのリースを作ったりする時に、もうクリスマスの喜びの中に生き始めている。それと同じです。多くの施設や団体、幼稚園などではアドベントに入りますと、クリスマス会が行われます。私も昨年までは10回以上のクリスマス会に出席していました。サンタクロースになってクリスマスのお話をしました。クリスマスが来るまでクリスマスを祝ってはいけないなんて事は全くありません。既に、クリスマスの喜びに包まれているからです。

3. 裁きと救い

さて、今朝は11月の最後の主の日ですので、旧約から御言葉を受けます。与えられている御言葉は、創世記のノアの洪水の所です。ここではっきり示されているのは、「神様の裁き」ということです。神様は悪を裁き、滅ぼされる。そのことがはっきりと示されています。6章5～7節には「6:5 主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、6:6 地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。6:7 主は言われた。『わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。』」とあります。神様の似た者として造られた人間が、悪い者になってしまった。それで、神様は人だけではなくて、家畜も這うものも空の鳥も、全て地上から拭い去るために洪水を起こされたわけです。これは厳しい、徹底した神様の裁きです。しかし、この時、神様は全ての人間、家畜や獣や鳥を滅ぼし尽くされるのではなくて、人間の中ではノアとその家族、そして動物などはそれぞれ一ツガイずつ取り分けて、ノアの造った方舟に入れて、洪水によっても滅ぶことがないようにされました。彼らだけを救い、そこから再出発をさせられたわけです。ここに「救い」もまたはっきりと記されています。聖書は、神様は私共を裁くことなく、全ての人が皆が救われますとは告げていません。裁きがあります。先ほど新約聖書のガラテヤの信徒への手紙6章7、8説を読みました。こう告げられています。「6:7 思い違いをしてはいけません。神は、人から侮られることはありません。人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。6:8 自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。」神様は侮られるようなお方ではなく、悪を裁かれます。しかし、その神様の裁きが行われるとき、同時に「救いの御業」がなされます。裁きと救いとは、コインの裏表のような関係です。裁きがなければ、救い也没有。

アドベントの時、私共は終末を目指して歩んでいることをしっかり受け止め、イエス様が再び来られる日に信仰の眼差しを向けるわけですが、この終末において何が起きるかと言えば、神様の裁きです。そして、その裁きから救われる私共に与えられる救いの完成です。そして、この神様の裁きと救いが、最も明らかに示されたのがイエス様の十字架と復活です。イエス様は十字架の上で徹底的に裁かれました。私共の罪のために、私共に代わって、徹底的に神様の裁きをお受けになりました。しかし、そのことによって、神様の私共に対する救いの御業は成就しました。神様はイエス様を復活させ、イエス様と一つにされた私共のために肉体の命を超えた永遠の命への道を開いてくださいました。これが聖書が告げる裁きと救いの関係です。

順に与えられた御言葉を見ていきますが、長いテキストですので、その中で大切な点をいくつか見ていきたいと思います。

4. 神様に従う人：神の言葉を聞いて従う人

第一に注目しなければならないことは、ノアは「神様に従う人」であったということです。それは、具体的に言えば「神様の言葉に従う人」であったということです。まず、ノアはとても大きな

方舟を造るように神様に告げられましたが、この言葉に従って彼は巨大な方舟を造りました。この方舟は三階建てで、現在の尺度に直せば長さ135 ム、幅22.5 ム、高さ13.5 メートルとなります。とんでもない大きさです。こんな大きな舟をどうやって作れたのかとか、これを木だけで作って実際に荒海の中を渡って行けたのか、強度は持つのか、そのようなことは今は論じません。ここで重要なことは、神様が洪水をもたらすと言われたその言葉を信じて、こんな大きな方舟を造りなさいと命ぜられた神様の言葉に従ってノアはこの方舟を造った、造り続けたということです。それはまさに、イエス様が再び来られる、終末が来る、という神様の言葉を信じてこの地上の歩みを為す私共の姿でもあります。終末なんて考えないで、神様なんて関係ない、毎日を面白おかしく生きていれば良いと考える人もいるでしょう。しかしそれは、「神様を侮った人の生き方」なのではないでしょうか。ノアはそうではありませんでした。

そしてノアは方舟を造り、洪水が起きると「**7:7 ノアは妻子や嫁たちと共に洪水を免れようと箱舟に入**」りました。それも全て5節「**7:5 ノアは、すべて主が命じられたとおりにした。**」とありますように、神様がその様にしなさいと告げられたからです。そして、洪水が止んだ時もそうでした。ちなみに、ここに出てくるノアの箱舟が大洪水の後、流れ着いたとされるアララト山は、現在同じ名前の山がトルコの東部、アルメニア地方にあります。五千メートルと4千メートルの二つの峰を持つ大きな山です。しかし、これは12世紀以降にヨーロッパ人により命名されたもので、この時の山とノアの方舟が着いた山を同じとは考えにくいでしょう。さて、ノアは最初は鳥を放ちます。鳥は出たり入ったりします。それで、ノアはまだ水が引いていないことを知ります。しばらくして、次に鳩を放ちます。鳩は戻ってきます。それで、ノアはまだ水が引いていないことを知ります。それから7日後に再び鳩を放ちますとオリーブの木の枝をくわえて鳩は戻ってきました。それで、ノアは水が引いたことを知ります。更に七日の後、ノアは鳩を放ちますと、鳩は戻ってきませんでした。それで、ノアは地が乾いたことを知りました。ノアは手順を踏んで水が引いたことを知ります。それでノアは方舟から出たのでしょうか。そうではありませんでした。ノアはもう地が乾いていることを知ったわけですから、だったら舟からすぐに出ても良さそうなものです。だって、雨が降り始めてから1年くらいたっているわけです。と言いますのは7章11節「**7:11 ノアの生涯の第六百年、第二の月の十七日、この日、大いなる深淵の源がことごとく裂け、天の窓が開かれた。**」とあり、8章13、14節を見ると「**8:13 ノアが六百一歳のとき、最初の月の一日に、地上の水は乾いた。ノアは箱舟の覆いを取り外して眺めた。見よ、地の面は乾いていた。 8:14 第二の月の二十七日になると、地はすっかり乾いた。**」閉じられた船の中に一年です。動物がたくさんいて、匂いも凄かったでしょう。さっさと外に出て、大地を踏みたかったでしょう。しかし、彼はそうしなかった。8章15、16節に「**8:15 神はノアに仰せになった。 8:16 『さあ、あなたもあなたの妻も、息子も嫁も、皆一緒に箱舟から出なさい。』**」とあります。この神様の言葉によって、ノアは方舟から出ました。この神様の言葉がない間は方舟を出ません。これがノアという人でした。ノアは与えられた神様の言葉に従って歩んだ。そしてそれは、聖書を通して神様が私共に求めている信仰者としてのあり方なのです。ノアに対してそうであったように、神様は私共に言葉を与え、道を備え、

必要の全てを与え、導いてくださいます。そのことを信頼して、神様の御言葉に信頼して歩んでいく。それが「神の子・神の僕」とされた私共の歩みです。

5. 神の言葉を聞く

では、どのようにして私共は神様の言葉を聞くのでしょうか？ノアのように、その時、その時にこうしなさいと神様がみ声をもって語りかけてくださるならば悩むことはありません。しかし、私共が具体的なことで、右に行けば良いのか、左行けば良いのか悩む時に、都合良く「右に行きなさい」とか「左に行きなさい」と神様の声が聞こえることなど、そうそうあるものではありません。しかし、「神の言葉に従う」ということが、私共の信仰の歩みの基本であることには違いありません。とすれば、どのようにして神様の言葉を私共は聞いていくのかということが問題になります。いくつか考えられます。

第一に、神様は聖書の言葉をもって私共に語りかけてくださいます。ですから、この神様の言葉としての聖書にいつも聞いているということが大切です。礼拝の中で、聖書の言葉を通して自分が為すべきことを示されるということもあるでしょう。また、何かあったときに、聖書の言葉が私共の心に蘇ってきて、私共に促しを与える。このような経験を皆さんもお持ちでしょう。そのためには、主の日の礼拝において御言葉を聞き続ける、聖書の学びと祈りの会において聖書の言葉の説き開かしを聞き続ける。日々の生活の中で聖書を読み、その言葉に思いを巡らす。そのようにして、いつも聖書の言葉と共にあるということが、とても大切です。

第二に、信仰の友、信仰の兄弟姉妹との交わりの中で、その言葉や生き方から、自分はこのようにしようと志が与えられることもあります。大切なことは、その時「神様が私に何をどうするようにと求めておられるのか？」ということ聞き取るということです。

第三に、置かれている状況の中で、促されるということもあります。私が会社を辞めて献身した時は、まさにそういうことでした。

この三つの場合は、大抵、重なっていることが多いでしょう。私共は具体的な状況の中で、様々な人々との交わりの中で、聖書の言葉を聞いているのですから当然です。様々な状況の中で私共は神様の言葉を聞き、促されるわけですが、大切なことはそれに従うということです。しかし、これが中々難しい。それは、私のプライドであったり、今まで経緯であったり、自分の欲や願望だったり、自らの正義・正しさだったり、邪魔をして、聞いても従わないということが起きてしまうからです。悔い改めることが出来ず、一步を踏み出せず、聞こえても聞こえないことにする、ということが私共の中で起きてしまうからです。私はこう思っています。多くの場合、私共はどうすれば良いのか知っている。神様の促しも受けている。しかし、それを無いことにするというのが私共の中で起きる。私もそうでした。牧師になるように召命を受けてから、神学校に行くまで7年かかりました。神様から受けた召命を、自分の勘違いだと思うことにしたからです。しかし、神様はそれをなかったことにはされませんでした。神様は御言葉と交わりと出来事をもって、必ず私共を御心に適う道へと導いてくださいます。

6. 神様が御業をなされる

さて、私がこのノアの話聞いたときに、「こんなことあるの？」と一番不思議だったのは、動物や鳥たちをノアはどうやって一ツガイずつ集めて方舟に入れることが出来たのかということでした。ノアも神様にそうするように命じられて、困ったんじゃないかと思います。聖書は7章14節～16節で「7:14 彼らと共にそれぞれの獣、それぞれの家畜、それぞれの地を這うもの、それぞれの鳥、小鳥や翼のあるものすべて、 7:15 命の霊をもつ肉なるものは、二つずつノアのもとに来て箱舟に入った。 7:16 神が命じられたとおりに、すべて肉なるものの雄と雌とが来た。主は、ノアの後ろで戸を閉ざされた。」と告げています。つまり、雄と雌がノアの元に来て、方舟に入っていたんですね。ノアが世界中に動物を集めに回って、一ツガイずつ連れてきて方舟に入れたんじゃないかなかったです。獣や家畜や鳥などが、自分の方からノアの元にやって来た。どういうことかと思いますが、これは神様が働かれたということを示しているのでしょう。方舟の戸を閉められたのも神様だったとはっきり記されています。

私共は「自分ではこれは出来ない」、「神様に求められても無理」と思ったりします。確かに、どう考えても自分には出来ないということもあるでしょう。しかし、神様が「こうしなさい」と言われたならば、神様はご自分の言葉に責任を持たれるお方ですから、必ず出来るようにしてください。自分だけでは出来なくても、神様は必ず必要な助け手を与えてくださいます。ちょうど、神様に対して「自分は口下手なのでイスラエルを導くことなど出来ません」と言うモーセに、弁舌が上手なアロンを神様は備えてくださった（出エジプト記 4:10 以下）ようにです。私は、いつもそのような助け手が与えられて、何とかここまで主のご用に仕えてくることが出来ました。一人の牧師・伝道者が出来ることなんて、ほんの小さな事でしかありません。また、全ての伝道者・牧師が様々な才能に恵まれている人とは限りません。私は運動も音楽も出来ません。文学的才能も事務処理能力もありません。ITも分かりません。きれいな字も絵も書けません。しかし、いつもそのような力や能力のある人が私には同労者・信仰の友として与えられ続けてきました。今もそうです。まことにありがたいことです。

神様がことを起こされると決めた以上、そのために私共を立ててくださった以上、必ずそれは成し遂げられます。私共の出来ないところにおいてこそ、神様の御業が為されていきます。そして、私共は神様の御名を誉め讃えることになります。パウロが「わたしは弱いときにこそ強い」（2コリント 12:10）と告げているとおりです。私共が弱いところにおいてこそ、神様が御業をもって支え、必要の全てを満たしてくださるからです。

7. ノアが最初にしたこと：礼拝

さて、ノアは陸に上がって最初に何をしましたでしょうか？ 8章20節「8:20 ノアは主のために祭壇を築いた。そしてすべての清い家畜と清い鳥のうちから取り、焼き尽くす献げ物として祭壇の上にささげた。」とあります。旧約において「祭壇を築いた」という言葉が出てきたら、それは「礼拝

した」という意味です。ノアは方舟を出て陸に上がると、何を差し置いてもまず最初に礼拝を捧げました。ここにも、私共のあるべき姿が示されています。まず礼拝。何はともあれ、まずは礼拝。そこから、私共の日々の歩みは始まります。礼拝から私共の全ての営みが始まっていきます。引越しをしたり、新しい生活を始めるとき、まず礼拝から始める。そのために、必要なら牧師を呼んでください。いつでも行きますよ。つまらない遠慮されませんように。

8. 二度としない

礼拝を捧げるノアに神様はこう告げられました。8章21.22節「8:21 主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。『人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。 8:22 地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも／寒さも暑さも、夏も冬も／昼も夜も、やむことはない。』」もう、全地を洪水で満たして、全ての者を裁き、滅ぼすようなことはしない。そう神様は告げられました。ノアとその家族は、ここから新しい人類としての再出発をするわけですが、彼らが良き人になったということはありませんでした。神様は「人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。」と知っているわけです。だけれども、もうこういう裁き方はしない。そう告げられました。赦すことにした、というわけではありません。しかし、やがてイエス様の十字架と復活によって与えられる完全な罪の赦しへと繋がる神様の御心がここに示されています。ノアの洪水の出来事はこのようにイエス様を指し示しています。

最近、温暖化で様々な問題が章味ていすけれど、洪水で全ての陸が水に沈むとか、季節が回ってこないということはありません。神様は「地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも／寒さも暑さも、夏も冬も／昼も夜も、やむことはない。」と約束してくださったからです。これからクリスマスに向かって寒くなっていきますけれど、この寒さの中に神様の代わらぬ私共に対しての愛が現れているわけですね。このことを感謝して、アドベントの日々、イエス様が再び来られる終末に向けて、信仰の眼差しをしっかり向けて歩んでまいりたいと願います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、ノアの洪水の出来事を通して、あなた様が私共に求め、期待しておられることが「御言葉に聞き従って歩む」事であることを教えてくださいました。あなた様の語りかけをしっかりと聞き取り、心に刻み、終末に向かって、御国に向かって健やかに歩いていくことが出来ますように。どうか、私共が自分の思いに囚われて、あなた様のみ声を聞き取れないようなことがありませんように。そして、既に私共を捕らえて離さない救いの喜びの中、アドベント第一週の日々を歩ませてください。聖霊なる神様の導きを心から祈り願います。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン